

—スタッフ紹介— (2020年4月以降)

役 職	スタッフ名
外科統括部長兼消化器外科部長 兼がん治療センター長 兼医療安全管理室室長 兼臨床研修センター副センター長	種村 匡弘
診療局長補佐兼部長 兼栄養管理センター長 (小児外科)	飯干 泰彦
医 長	金 浩敏
医 長	野中 亮児
医 長	松浦 雄祐
医 長	東 重慶
医 長	古川 陽菜
医 員	松本 謙一
医 員	田村 地生
医 長 (乳腺外科)	綱島 亮
医 員 (乳腺外科)	奥野 潤
非常勤医員	的羽 大二朗
非常勤医員	松田 大樹
非常勤医員	久保 杏奈
非常勤医員	出村 公一

—概要—

当センターの外科は消化器外科(上部消化管、下部消化管、肝胆膵)と小児外科、乳腺外科から構成され、カンファレンスや送別会、歓迎会などの医局行事は一体で活動している。消化器外科は、2019年4月に種村が外科統括部長として大阪警察病院 肝胆膵外科より赴任し外科全体の管理・運営を行っている。2020年4月にはスタッフ2名、チーフレジデント1名が異動となり、今後も人事刷新によりフレッシュなパワーが注入されると期待している。年間の全麻手術件数は約600例弱(乳腺外科症例を除く)で推移している。また、これまで懸案であった急性期医療に対しても外科と救命救急部との連携を強化し、緊急手術が必要な急性腹痛、高度腹部外傷の患者さんの受け入れも積極的に進めていきたいと考えている。

診療内容は各専門グループ別に述べる。

◇ 上部消化管:東(医長)、古川(医長)

2016年より当センター上部チームのリーダーとして頑張っていた出村医長が2020年3月末で異動となり、4月より大阪労災病院より古川医長が着任した。当センターでは胃癌手術症例は年々増加傾向であり、2019年では68例であった。腹腔鏡手術に力を入れており腹腔鏡手術割合は83%であった。当科では全ての胃癌術式において腹腔鏡手術を導入しており幽門側胃切除術、胃部分切除術にとどまらず、胃全摘術、噴門側胃切除術においても腹腔鏡手術を導入している。また進行胃癌においても安全性を十分に担保できると考えられた症例には積極的に腹腔鏡手術を行っている。また体腔内吻合を行い、開腹創をできるだけ小さくした完全腹腔鏡手術を行っている。手術前日に入院していただき、術後は平均9~12日で退院できている。

◇ 下部消化管:金(医長)、野中(医長)

2019年の当科での大腸癌手術の約90%を腹腔鏡下手術で施行した。新しい手術手技として肛門に近く、比較的小さな癌に対しては経肛門的に直腸内を二酸化炭素で広げ、カメラ画像を見ながら鉗子で直腸腫瘍を切除する内視鏡下手術(経肛門式内視鏡下手術:Transanal minimally invasive

surgery; TAMIS)を実施している。さらに直腸癌に対する腹腔鏡手術では骨盤内での手術操作が必要とされる。当科では経肛門的直腸間膜全切除術(Transanal Total Mesorectal Excision; TaTME)を導入し、腹腔側アプローチだけではなく、経肛門的にもアプローチし2チームで行うことで、腹腔側アプローチだけでは剥離操作が困難である骨盤深部の操作をより適切な剥離層で行い、安全で、癌根治性の高い直腸癌手術を行っている。

今後は、上部・下部消化管を通して遅ればせながらロボット手術を導入すべく動いていきたいと考えている。

◇ 肝胆膵:種村(外科統括部長兼消化器外科部長)、松浦(医長)、松本(医員)

肝胆膵領域癌、胆石および鼠径ヘルニアの外科診療を行っている。2019年は26例の高難度手術を実施できた。2020年は30例以上の高難度手術を実施し日本肝胆膵外科学会の高度技能医修練施設に認定されることを目標としている。また、KHBOをはじめ阪大 肝胆膵疾患グループの多施設共同研究に積極的に参加することで先進の集学的治療の確立に取り組んでいる。さらに膵癌における生きたCirculating Tumor Cells (CTCs), Peritoneal Lavage Tumor Cells (PTCs)の検出・解析を行っており、りんくうから新しいエビデンスを発信できるオンリーワンの研究も進めていきたいと考えている。

◇ 教育・若手育成について

当科では2名の外科専門医プログラムのレジデントと1~2名の初期研修医が研修している。手術手技の習得に向け、単に手術を見学するだけでなく、できるだけ多くの手術症例への手術参加、執刀を積極的にさせている。また、当センターでは筆頭発表での学会参加、論文投稿料の費用サポートがあり学会発表、論文作成などアカデミックワークも積極的に指導していく方針である。

また、2021年4月からは大阪大学 消化器外科江口英利教授のご推薦もあり、藤井 努教授が担当されている富山大学消化器外科の専門医プログラムとの連携をとる予定であり、大阪以外の地域との外科医教育の輪が広がり良い刺激となることを期待している。

—今年度の成果と反省点—

消化器外科診療については、胃癌、大腸癌、肝胆膵領域癌の手術件数は現状維持から漸増傾向である。しかし、急性虫垂炎、ヘルニア嵌頓などの緊急手術症例は減少傾向であり、近医からの紹介症例をもれなく受け入れる体制を構築する必要がある。

学術活動については、当科が反省し、今後の奮起が求められる領域である。消化器外科在籍人数に対して学会発表、論文発表が少ないのが問題であると考えている。新年度はより活発な学術活動を指導していく所存である。

—来年度への抱負—

安心・安全で、信頼できる医療を提供すべく、消化器外科全体としての目標症例数は580~600例/年を目標としたい。また、腹腔鏡での手術アプローチ実施率を維持し低侵襲治療の推進を図っていききたいと考えている。

2019年ラグビー・ワールドカップで日本代表を率いたジェイミー・ジョセフヘッドコーチが掲げた「One Team」が新語・流行語大賞に選ばれたことは記憶に新しいところである。われわれは、当センター 消化器外科をどのようにワンチームにするか

が大事であると考えており、りんくう総合医療センターとしての臨床的・学術的活動の文化、中身をしっかりと考え、共有することで「真のワンチーム」にまとまっていきたいと考えている。

## —実績—

### 【手術実績】

上部（食道・胃・十二指腸）	
食道癌	6
胃悪性腫瘍	59
胃・十二指腸潰瘍・その他	9
食道裂孔ヘルニア	1
計	75

下部（小腸・大腸・肛門）	
結腸癌	68
直腸癌	60
その他悪性腫瘍	0
小腸・大腸粘膜下腫瘍	1
その他	29
計	158

虫垂炎	
急性虫垂炎	39

肝胆膵	
肝細胞癌	10
胆道癌	3
転移性肝癌	6
胆石・胆嚢炎	83
膵癌・十二指腸乳頭部癌	14
その他	7
計	123

イレウス	
イレウス	9

ヘルニア	
鼠径ヘルニア	98
腹壁癒痕ヘルニア	5
大腿ヘルニア	2
その他	2
計	107

乳腺甲状腺	
乳癌	76
乳腺腫瘍	13
甲状腺癌	13
甲状腺腫瘍	2
その他の甲状腺疾患	0
計	104

小児外科	
鼠径ヘルニア	33
臍ヘルニア	17
虫垂炎	4
その他	2
計	56

その他	
腹膜炎・その他	5

<b>総計</b>	<b>676</b>
-----------	------------

### 【外科メンバー集合写真】



### 【外科手術】



### —症例集積中の臨床研究—

研究内容
新規乳癌症例を対象とした多重遺伝子検査「Curebest® 95GC Breast」を用いた再発予後予測と個別化医療の実施および入手データをを用いた解析を行うための包括同意取得
下部消化管手術における筋膜閉鎖法についての前向き観察研究（抗菌糸と非抗菌糸の比較）
外科症例臨床データベースを利用した臨床調査研究
高度リンパ節転移を伴う進行胃癌に対するカペシタビン+オキサリプラチン周術期（CapeOx）療法の第Ⅱ相試験（OGSG1701）
Ramucirumab抵抗性進行胃癌に対するramucirumab+Irinotecan併用療法のインターグループランダム化第Ⅲ相試験（RINDBeRG試験）
肝葉切除を伴わない胆道がん切除例を対象としたゲムシタビン/シスプラチン（GC）併用療法とゲムシタビン/S-1（GS）併用療法の術後補助化学療法のランダム化第Ⅱ相試験（KHB01901）
大型3型/4型胃癌に対する術前S-1+Oxaliplatin+ Docetaxel 併用療法の有効性と安全性確認第Ⅱ相試験（OGSG1902）
胃癌StageⅢの術後Docetaxel+S1（DS）療法後早期再発症例に対するRamucirumab+Irinotecan併用療法第Ⅱ相施設共同臨床試験
左葉系肝切除後の胃内容物排出遅延に対する癒着防止材（セプラフィルム）の有効性に関する検討
治癒切除困難な膵癌に対する術前化学療法としてGEM/S-1とGEM/nab-PTXを比較するランダム化第Ⅱ相試験
肝胆膵外科手術後の表層および深部感染後の切開創治療における陰圧閉鎖療法（Negative Pressure Wound Therapy:NPWT）の有効性に関する前向き検討
肝胆膵領域悪性腫瘍に対する術後静脈血栓塞栓症予防に対するエノキサパリン投与の第Ⅱ相ランダム化比較試験